

熱帯 バイオマス社会

2010年8月

フィールドトリップ参加者報告	
藤田 素子	1
市川 哲	2
Logie Seman 氏	
講演会報告	5
Lee Hua Seng 氏	
講演会報告	7
プロジェクト関連の企画など	8
プロジェクト参加メンバー	9

日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤研究 (S)

東南アジア熱帯域における プランテーション型バイオマス社会の 総合的研究



マレーシア・サラワク州の事前の調査を終えて

藤田 素子(京都大学東南アジア研究所)



今回の調査で、アナツバメ¹(以下ツバメ)に関する面白い情報は主にふたつあった。ひとつはツバメの生態に関すること、もうひとつはアナツバメをめぐる人々の動向で、現地を歩きながら見聞きしたことである。

食用となる主なアナツバメには2種類いて、最も価値が高い Edible-nest Swiftlet (学名: *Aerodramus fuciphagus*、以下 *A.fuciphagus*) と、Black-nest Swiftlet (学名: *Aerodramus maximus*、以下 *A.maximus*) がある。概して、*A.fuciphagus* は海岸沿いを離れることはまれで、ツバメハウス²に入るのもこの種であるようだ。一方 *A.maximus* は山沿いの洞窟などに多く、ツバメハウスにはほとんど入らない。実際、*A.maximus* の多い Bau 近辺に作られたツバメハウスにはツバメが営巣せず、建設費を無駄にしてしまったという。

また、*A.fuciphagus* に関してもさらに複数の“亜種”が存在し、それぞれにハウスに営巣するもの、洞窟に営巣するもの、Java 島から持ち込まれたものなどがあるという。サラワクで近年増えているのは Java から持ち込まれた亜種で、元々インドネシア側(カリマンタン)で作られたハウスに入った個体群の一部が、大規模な火災によってマレーシア側(サラワク)に移動してきたのだという噂話もある。確かに、ボルネオ島のインドネシア側は森林火災が多いことで知られるが、その話の信憑性は確認する必要があるだろう。



ツバメハウス

サラワクで激増するツバメハウスに営巣しているのがその亜種だとして、彼らが勢力をふるうようになった要因は何なのだろうか? 人の手で持ち込まれたのだとしても、環境への適応力が低ければこれほど増えなかっただろう。そもそも、かなりの割合で都市部に作られているツバメハウスのツバメたちは、どこで何を食べているのだろうか? 都市で餌を探しているのか、それとも近く/遠くの餌場まで通勤しなければならないのか? 豊富に



Bukit Sarang で洞窟内のアナツバメの営巣地を調査

撮影: 大竹 真二

餌があると思われる場所のツバメたちと、餌のメニューは違うのだろうか? どういう土地利用が彼らの餌場となっているのだろうか? そしてなぜ、*A.maximus* はハウスに入らないのだろうか?

もうひとつ気になるのは、インドネシアとの比較である。私が調査で訪れる機会のあったスマトラ島では、サラワクの常識とややずれているように見えることがあった。例えば、南スマトラ州 Batu Raja という町は、バリサン山脈の麓に位置し、決して海から近いとはいえない(とはいえ山脈を越えれば直線距離で100km、泥炭湿地までも100km程度ではあるが)にも関わらず、ツバメハウスがある。ただし、入っているツバメがどの種であるかまでは確認できていない。また、インターネットで飛び交っている情報なので正確なところは分からないが、*A.maximus* もツバメハウスに入るという人もいる。この違いが本当にあるのだとすると、その理由を探ることはとても興味深いことだろう。



アナツバメの巣(中央)と壁面に残る多数の巣跡

アナツバメの面白いところは、こういった生態学的な興味が人々の動きに直結することだ。これまで数百年の間、この地に生息するツバメの巣は洞窟を主な採集場所とし、現地の限られた人々のみが巣の採集権を持っていた。その権利は地域固有の方法で代々受け継がれ、いってみれば不動産のような位置づけだったのだと思う。その権利を巡るひとつひとつの動きもとても興味深い。しかし、ここ数年のツバメハウスの出現によってサラワク中の多くの人々が、一攫千金を狙って競って家を建て(もしくは改造し)始めたことも、ツバメのなせる技である。サラワクでは、ホテルがツバメハウスに改造されてしまった例もある。

人を泊めるよりもツバメを泊めるほうが儲かるようである。なにせ、成功すれば1カ月に200万円近くもの収益があがることもある。州政府も、ツバメハウスは重要な産業とみなし、推進している。一体これは、人がツバメを利用しているのか、それともツバメが人を利用しているのか？

ツバメの巣の主な消費が、中国人（または華僑）によることも、これから伸びる産業として注目を浴びる理由のひとつだろう。どのような産業もそうだろうが、プラスの面があればマイナスの面がある。生態学的にはツバメは飛翔性昆虫を食べるので、虫の大発生を防ぐ役割を持つ一方で、他種・他亜種との競合が起こるなどの問題もある。また、密閉空間に営巣させるために、糞などに含まれる病原菌による人間への影響なども注意する必要があるだろう。とはいえ、まだまだ続きそうなツバメと人との関係を、これからも興味深く観察していきたい。

¹ 日本で目にするツバメ *Hirundo rustica* はスズメ目ツバメ科だが、アナツバメの仲間はアマツバメ目アナツバメ科に属し、二つの科は分類学的には非常に離れている。本稿では便宜的にアナツバメ科の鳥のことをツバメと称しているが、ツバメ科の鳥は一切含まない。

² アナツバメ類を呼び込み、食用の巣を作らせて採集するため作られた家。1階建て〜3階建て程度までの一軒家のこともあれば、商業用の長屋を改造したもの、ホテルを改造したものなど様々。

サラワク調査レポート：異分野・他領域研究者との華人研究の可能性について

市川 哲（立教大学AIC）



報告者はこれまでサラワクの華人を対象とし、特に華人と先住民との間の経済活動や婚姻関係、養子関係等に注目した調査を行ってきた。このレポートでは報告者のこれまでの華人を対象とした調査経験から、文理融合的なチームによる調査の特徴について述べてみたい。今回の調査で一番の収穫であったのは、異なる分野の研究者とチームを組んで行う調査の可能性である。報告者に限らず、ほとんどの人文社会科学系の研究者は単独でフィールドワークを行うことが多い。単独で行う調査には、単独でなければ得ら



サガンの華人商店 この商店の店主は中国出身の第一世代で、サラワクのイバンの女性と結婚した 息子さんも近所で商店を営んでいる。

れない情報や経験があるため、大変有効な調査方法であるといえる。また人文社会科学系の研究を行う限りでは、基本的に大人数で調査チームを編成することはなく、もしそのようなことがあっても、それは首都や調査地の都市部を訪問する段階までで、それ以降、よりインテンシブな調査を行う場合は個人プレーになることが一般的であった。そのため今回のように文系・理系の異なる学問分野を専門とする研究者とともに、常に10人前後のチームで調査地を訪問するという調査スタイルは報告者にとって初めての経験であった。実際に調査チームに参加する以前は、はたしてどのような調査になるのか、多少の不安もあった。だが実際には、石川先生、祖田先生をはじめとする方々のお力により、大変有意義な、得難い経験をすることが出来た。

華人を対象とした調査という観点から見ると、チームで行う調査の利点としてあげられるのは、調査協力者から警戒されることが意外と少ないということである。非常に単純なレベルの話であるが、サラワクで華人を対象として個人で調査を行うと、警戒されることが多く、飛び込みでの調査はなかなか受け入れられないということが現実問題としてしばしば起こる。もちろん知人の紹介等を通して面会すれば警戒されることはないので、報告者を始め多くの華人研究者は、まず何らかのつてを頼って調査地に入ることが多い。またサラワクに限らず、マレーシアの華人は主に都市でビジネスを行う人々が多いため、個人での飛び込み調査には限界があることは、ある程度仕方ないことではある。そのような経験から、報告者は今回のように10人前後のチームでの調査を行った場合、各調査地で出会う華人たちに警戒されないかどうか心配していたが、それは杞憂であった。むしろ単独で動き回り、店のオーナー等に話しかける、いわゆる飛び込み調査のスタイルよりも、はるかに好意的に接してもらうことが出来た。これは明らかに日本人と分かる人々が10人前後で移動するのを見た場合、警戒心よりも好奇心を強く持つためなのかもしれない。そのため、これまでのように単独で動き回っていた際には得られなかったような情報、特に河川上流域における華人コミュニティの現状や、華人と先住民との関係等について知ることが出来た。



アカシア・プランテーション内部にて 養蜂を行う中国人が所有するミツバチの巣箱

これは調査テーマの本質とは関係のないことであるが、今回の調査では、このようにチームでの調査の特徴について考えさ

せられる事が多かった。そのため、以下ではそうした発見と今後の調査の可能性について書きたい。

① 華人と他民族との交流について

本調査で特に収穫があったのは、他分野の研究者とともに調査することにより、華人と他の先住民との相互関係に関する知見を得ることが出来たことである。マレーやイバン、ブナンといった先住民を対象とした調査を行ってきた研究者とともにピントゥルやタタウ、サガンといった都市や、Anap Muput の伐採場、イバンのロングハウス、Kakus のツバメが営巣する洞窟等を共に訪問することにより、これまであまり知ることがなかった華人と先住民の交流パターンや、先住民からの華人観といったものを知ることが出来た。今回の調査では直接、華人と先住民の交流等を参与観察したり、聞き取りによって包括的なデータを集めたりすることこそできなかったが、今後、当該地域で調査を進めるに当たり、有益な情報やアドバイスを受けることが出来たのは大変有益であった。

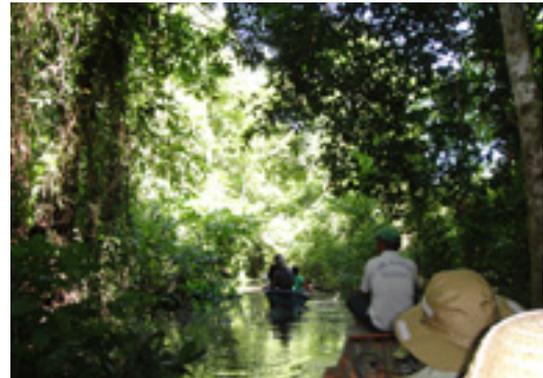
都市部の商店や企業、学校等で、華人が他の先住民と交流することはサラワクに限らず、マレーシアではごく一般的な現象である。このような公的な場面や経済活動に関わる場面では、マレーシアの異なる民族集団は相互に分離しているわけではない。だが、それ以外の場面、例えば日常生活の場では、それぞれの民族集団は驚くほど交流がないというのも事実である。実際に（筆者を含めて）マレーシアの各民族集団を調査対象とする研究者は、自己が調査対象とする民族集団以外の人々についてはなかなか知るチャンスがない。このような、自己の研究対象以外の民族集団に関する詳細かつ専門的な知識を得るのは、マレーシアに限らず、多民族社会を研究する人文社会科学系研究者が等しく抱える困難であるといえよう。だがマレーシア社会、あるいはもっと限定してサラワク社会を理解するためには、特定の民族集団を対象とした調査・研究を行うと共に、それら複数の民族集団や地域社会がいかなる関係の中に置かれているのかを理解することは重要な研究テーマだと思われる。このような調査上の困難を乗り越えるために、他の民族集団を対象とした調査・研究を行っている研究者と、「共同研究」ではなく「共同調査」を行うという手法は、大変優れているということを実感した。

② 河川上流の華人のコミュニティと活動について

今回の調査では、サラワクの内陸部、特に河川上流域における華人の活動やコミュニティを対象とする調査のきっかけを得ることもできた。今回の調査では筆者は途中参加であったため、ジュラロン川上流域の訪問に同行することが出来なかった。だが調査に参加したメンバーからは、ロングハウスの中に居住している華人の存在について聞くことが出来た。このように、都市や華人集住地域を離れ、先住民のコミュニティに入っていく華人の存在については、断片的な情報があるのみであり、包括的な研究は皆無に等しい。このような先住民コミュニティの中で

生活する華人を対象とした調査・研究は、サラワクにおける華人社会の地域的特徴を理解するための大変興味深い事例となると思われる。

これまでのサラワク華人社会を対象とした先行研究の多くも、沿岸部や都市部と内陸部を河川流域に居住する様々な民族集団が媒介していること、そしてその中で華人が果たす役割に注目してきた。しかし先行研究の多くは歴史的な記述が多く、サラワクの河川流域で華人がいかなる活動を行ってきたか、またどのような生活を送っているのかといった現代的な問題を扱うものは少なかった。だがサラワクにおける華人社会の地域的特色を理解するためには、大規模な華人コミュニティが存在する



カクスにて 水没した森林の中をロング・ボートでツバメの巣のある洞窟に向かうところ

都市部だけでなく、先住民と様々な形で交流する機会が多い河川の上流域の比較的小規模な華人社会を調査することは有効な手法であると思われる。特定の河川流域を調査地とし、そこを異なる専門分野の複数の研究者がそれぞれのディシプリンと問題意識に従って調査するという本研究プロジェクトは、サラワクにおける華人研究にとっても重要な切り口となると思われる。

③ 「混血」華人の存在について

今回の調査では、両親に華人と先住民を共に持つ方や、幼少時に華人の家庭に養子に取られた先住民の方とお会いすることが出来た。このような、いわゆる「混血華人」や、華人の養子となった先住民を視野に入れた研究の可能性を見出すことが出来たのも今回の調査の大きな収穫であった。例えばサガンで出会ったある男性の母親はイバンの女性だが、父親は中国出身の第一世代であり、男性もイバン語に加え、福建語を話すことが出来るとのことであった。また Kakus でツバメの巣を管理する華人として紹介された男性は、イバン人の両親のもとに生まれたが、幼少時に華人の家庭に引き取られ、華人として成長したとのことであった。これらの方々以外にも、今回の調査では何人かのいわゆる「混血」の華人の方々とお会いした。このような方々はサラワクでは特段珍しくはないが、それでも一週間程度の期間でこのように頻繁に「混血」の方や、華人に養子に採られた先住民の方とお会いした報告者にとっては初めての経験であった。

また前述のように、ジュラロン川上流域への合同調査に参加

した方々の話からは、婚姻により先住民のロングハウスで居住する華人が何人か存在し、さらには先住民と華人の両親を持つ、いわゆる「混血」の方も存在するとのことであった。このような方々は、クムナ川流域やジュラロン川流域ではそれほど珍しくないとのことであり、今後、華人と先住民との相互関係や、サラワクにおける華人の現地化の過程を調査するためには、これらの方々を対象とした調査も興味深いのではないかと考えた。半島部のプラナカンと呼ばれる人々や、サバのシノ・カダザンと呼ばれる人々と比較した場合、サラワクにおける混血の華人の存在についてはこれまであまり注目されず、先行研究でも言及されることが少なかった。だが華人と他の民族集団との地域的な交流パターンの特徴を知るためには、このような華人と先住民を共に両親を持つ人々への注目は有効な調査方法の一つであると思われる。このような華人と先住民を共に両親を持つ人々を対象とした調査・研究の可能性を見出すことが出来た。

④ サラワク域外との関係について

報告者はマレーシア研究を本格的に開始する以前、パプアニューギニアで現地調査を行ってきた。現在、パプアニューギニアには中国やインドネシアといった東・東南アジア諸国から中国系移民が流入してきているが、中でも目立つのがマレーシア華人であった。この時の経験から、マレーシア華人のトランスナショナルな活動に関心を持っていたが、今回の調査ではヒトの移動だけでなく、モノの移動もマレーシア華人のトランスナショナルな活動を理解するための一つの手がかりになると思われた。

マレーシア華人が関わるモノのトランスナショナルな流通の代表例が、上述したツバメの巣である。ツバメの巣は中華料理の食材として珍重されることはよく知られているが、ツバメの巣自体が採集できる地域は中国国内にはそれほどないため、大部分が中国国外で入手されることとなる。このような、サラワクと域外社会をとむすぶ商品としてのツバメの巣には以前から興味があり、都市部の販売店で話を聞いたりしたが、実際にどのようにして採集され、流通するのかを調べることはなかった。だが今回は他の専門分野の研究者とともに共同でツバメの巣に関する調査を行うことが出来た。特に華人が他の民族集団といかなる関係を保持しているのかを調査する方向性を見出したのは大きな収穫であった。Kakusを訪問した際には実際に巣が採集される洞窟を実見することが出来ただけでなく、現地のPunan Kakusの人々がツバメが巣を作る洞窟をどのように所有・利用しているのか、また華人がいかんして持続的に巣を採集するために管理しているのか、といったことを知れたのは有益であった。これまで東南アジアにおけるツバメの巣の採集や流通、消費といったテーマに関する現地調査に基づく民族誌的な報告は非常に少なかった。だがサラワクにおける複数の民族集団の相互関係や、サラワクと域外社会との関係に注目する際には、ツバメの巣のような複数の民族集団や地域社会が採

集や流通、消費に関わる物品に注目することは大変有効な切り口なのではないかと思われる。

以上、ここでは四点をあげたが、今後の調査によってはさらに多くの研究テーマが見つかると思われる。このような「流域」という特定の地理的範囲の中で、異なる専門分野の研究者が共同で調査することは、サラワク華人社会、さらにマレーシア全体の華人社会を研究する上でも重要な示唆を与えられる。

マレーシア華人社会を対象とした先行研究は圧倒的に半島部のものが多く、サバ・サラワクを対象とするものは少なかった。だが T'ien Ju-Kang の古典的な調査や Daniel Chew や Danny Wong の歴史的なモノグラフ等、東マレーシアの華人研究にも興味深いものが存在する。マレーシア研究の中ではこれまでも、中国とは異なるマレーシアにおける華人の現地というテーマが盛んに研究されてきた。だがサバやサラワクといった東マレーシアにおける華人が、他の民族集団とどのようにして交流してきたのかに関する研究は非常に少なかった。確かにクチンやシブといった大都市では華人は独自のコミュニティを形成し、華人を中心とした社会生活を送っている人々も存在する。だが半島とは異なる地理的・歴史的背景を持ち、民族構成も異なるサラワクにおける華人が、他の民族集団といかなる交渉の過程におかれているのかを研究することは、サラワクの地域研究のみならず、マレーシア研究そのものにも益することが多いのであろう。今回の調査への参加は、このような東マレーシアにおける華人社会を対象とする研究の可能性について改めて考え直す契機となった



ビントウルの街中にて 上層階をバード・ハウスにしたショップ・ハウス

As I Can Remember: Timber-related activities in Kemena/Jelalong region in the 1980s and 1990s (Logie Seman氏講演会報告2010年10月7日)

2010年10月7～8日に、マレーシア・サラワク森林局のロギー・スマン氏を招へいし、本科研プロジェクトのメンバーとともに、和歌山県有田川町の京都大学フィールド科学教育研究センター和歌山研究林を訪問した。その際、2010年12月に定年退職を迎えるロギー



氏に、これまでの森林局での経験に基づく講演を行ってもらうよう依頼した。ロギー氏は1972年にサラワク森林局に入り、以来38年間、おもに森林調査官 Forest Rangerとして仕事をしてきた。その間、サラワク各地の森林を見てきたが、1987年からの約4年間は、本プロジェクトの調査地でもある Tubau および Bintulu での勤務を経験した。今回の発表では、Tubau での経験を中心にしつつ、長年現場で働いてきた立場から、Kemena 川、Jelalong 川流域の木材資源をめぐる状況について語っていただいた。

ロギー氏が森林局で経験してきた仕事は、非常に多岐にわたる。主なものとしては、木材・森林管理、地方森林行政職、森林生態調査、社会林業普及などがあるが、とくに、オーストラリア医療研究開発プロジェクト (AMRAD) と一緒に行った民族植物学的調査や、高知大学グループとの土壌学的調査は印象に残っている。

1987年にBintulu地区への赴任が決まったのは、突然で予想外のことであった。家族のことや引っ越しのことで非常に心を痛めたが、決定に従うしかなかった。Tubauでは、町のショップハウスの一角に部屋を借りて、Kemena 川、Jelalong 川流域での仕事に従事していたが、そのころの Tubau は、まだよう



Tubau の栈橋 建設当時の模様

やく栈橋を築き始めたばかりの、本当に田舎の町だった。

さて、Kemena / Jelalong 川流域での主な仕事は、伐採会社が切り出してきた木材を検査し、それらにかかる税額評価を行ったり、規定の伐採量や伐採樹種を守っているかどうかのモニタリングを行ったりすることであった。また、伐採会社と現地住民との間の交渉／係争の仲介や、大臣や政府高官による現地視察のエスコート、現地住民による違法伐採の調査・監視



違法材を調査中のロギー氏

などを行うこともあった。

Kemena / Jelalong 川流域において伐採のコンセッションを持っている (持っていた) 主な企業は、以下のとおりである (カッコ内は本社所在地)。

- Rimbunan Hijau (Sibu)
- Samling (Miri)
- Shin Yang (Miri)
- KTS (Sibu)
- Hock Lee (Bintulu)
- Hock Seng (Bintulu)
- Liangti (Sibu)
- Goodwood (Sibu)
- All Keys (Sibu)
- Sebauh Sawmill (Bintulu)

伐採権は、州政府によって与えられ、永久林、州有地、私有地等において付与される。Kemena / Jelalong 川流域では、伐採企業と現地住民との間で、それほど激しい衝突はなかったが、両者の間での交渉は一定程度あった。よりシビアな衝突として個人的に印象に残っているのは、同じ Bintulu 地区内ではあるが流域の異なる Sangan (Tatau 川上流) での、交渉仲介作業である。このときは、銃や山刀を持った住民が伐採キャンプに押し寄せ、恐れをなした企業側の人間は事務所の中にもったままだったので、森林局職員が住民の意見を聞いて、それを企業側の人間に伝えるという役割を担った。こうした係争を鎮静化するのも森林調査官の仕事の一つであり、1980年代から90年代にかけて、サラワク各地で様々な民族の抗議行動

を目の当たりにした。そうした経験の中で言えることは、次のようなことである。

- 現地住民は自らの土地やコミュニティ林を守るために、また、水質の汚染や森林破壊に対する補償を少しでも多く得るために、抗議行動を起こす。
- 伐採企業は、数多くの民族のなかでも、とくに遊動ブナンに対しては敏感に反応するが、それは、ブナンが世界的な注目を浴びていることが影響している。
- とくに東ブナンは、カヤンやイバンなど、他の民族と比べても抗議行動がタフでアグレッシブである。
- 自分自身の経験で言えば、交渉力の大きさは、ブナン>カヤン>イバンの順で、もともと軟弱で交渉下手なのはビダユである。その他のオラン・ウルは、だいたいカヤンと同じアプローチの仕方である

一方、交渉をうまく進めることによって、現地住民が伐採活動から得られる利益というのもある。企業側からは、伐採にかかわる補償金 compensation のほか、伐採量に応じた手数料 commission、村の冠婚葬祭時に支払われる見舞金 goodwill money、村長や地元リーダーに対する手当 allowance など、さまざまなタイプの現金が供与される。そればかりではなく、たとえば伐採道路を住民が自由に使用することを認めるなど、伐採企業は直接的・間接的に住民との関係構築・維持を図り、抗議行動を避ける工夫もしている。

現地の住民にとっては、企業の伐採活動によって、賃金労働の機会を得ることもできるが、それ以外にも、違法伐採によって現金収入の機会が増えるという点は重要である。Kemena / Jelalong 川流域には、ブナンやカヤン、イバンなど、多様な民族が居住しているが、すべての民族が違法伐採に従事してきたと考えてよい。この地域での違法伐採は、次のようなプロセスで行われてきた。

- 雨季になって河川水位が上がる頃を見計らって、事前に河畔の木材を伐採しておく。
- 洪水が起こって陸地まで浸水したときに、切り倒しておいた木材が浮いてくるので、それをボートで曳いて河岸まで運ぶ。
- 河岸に集めた木材を筏に組んで、中下流の製材工場まで流して運ぶ。
- 製材工場で、運んだ木材量・樹種に応じて現金を受領する。

場合によっては、チェーンソーで角材にしてから運ぶこともあるが、住民と製材工場との間をシンジケートが仲介することもあるが、いずれにせよ、1980年代末の Kemena / Jelalong 流域住民にとっては、非常に重要な現金収入の機会として違法伐採があった。現在では、先住民の領域（慣習地）において売却できる木材が相対的に少なくなったため、こうした違法伐採の活動は以前ほど隆盛ではないが、まだ細々と続いている。

サラワク州政府の木材関連事業に対する方針としては、やはり、税金や雇用、外貨獲得といった面への関心が大きいため、企業による伐採活動が停止することはない。ただ、単に木材を切って売だけではなく、上流から下流まで、木材にかかわる様々な産業（製材のほか、家具、木製モールド、木質ファイバーの生産など）の育成にも力を入れており、最近では環境へのインパクトを軽減させた持続的森林経営にも配慮している。

木材伐採をめぐる状況にはいろいろ問題はあるにせよ、Jelalong 川上流域は、下流域の各地と比べても木材資源量はまだ豊富にあると、個人的には感じている。この地域での伐採活動は、企業にとっても重要であると同時に、現地住民にとっては、自家消費の建築資材としても、貴重な現金収入源としても、依然として非常に重要であると思われる。

（報告：祖田 亮次）

Some aspects of forestry in Sarawak in the seventies (Lee Hua Seng 氏講演会報告2010年11月17日)

Lee Hua Seng 氏は、1970年、オーストラリア国立大学で森林学を修めた直後に、サラワク森林局の Assistant Director として職務に就いた。大学卒業と同時に、学歴を積んだリー氏の帰国を待ち受けていたのは、ビントゥル県区内陸部の木材伐採ベースキャンプへの直赴任であった。



雇用契約にかんする書類等の事務的な手続きさえもなかったというが、この唐突ともいえる現場への配属は、当時みられた南洋材への国際的な需要の急速な高まりにより、サラワク州内の林業開発が急務の課題とされていたことによる。

サラワク森林局は1919年に設立されたが、とくに林業セクター整備を目的として、1967年に国連に対し専門家の人材派遣を求めた。これによって、政府と民間企業との連携を強化し、より産業の育成をめざすべく事務管理の効率化をめざした。そしてリー氏は、森林評価調査官 (Forest Inventory Officer) として、州内で8地域に定められた評価区画のうち、ビントゥル地区の Anap および Kakus の2区画を担当した。ロジスティクス面の整備役として地域のロングハウスの住民らとも親しみ、また一方では、密林内にヘリコプター発着所を敷設するために上空機内から身を乗り出して決死の作業もおこなったと振り返る。

1970年代の森林資源を基盤としたサラワクの木材産業とは、まず伐木業と製材業が重要な位置をしめ、そしてベニヤおよび合板、家具、形板、ダボ (木材を接ぐ際に接合面に差し込む小片)、積層板、チップ、ジェルトン材、ニッパヤシ (砂糖やアルコール製造用) などの製造業が続いた。またさらにエンカバンの樹木から採れるイリッペナツツの実や、ラタン、ダマール樹脂、そしてツバメの巣 (これも森林産物とされる) などが産業を構成する商品であった。

そして70年代の伐採と木材産業の展開についてリー氏は年度をおって説明した。まず1970年は、サラワク森林局と国際連合食糧農業機関 (FAO) との間でおこなわれた3年間の森林資源調査の2年目にあたり、調査は沿岸部の Mukah と Balingian および Kakus 川上流に集中しておこなわれた。この年の丸太生産量は前年より増加をみせるが、FAOの調査の結果を受けて、新たな伐採ライセンスの発行が停止された。1971年はFAOとの調査が終了。伐採業は世界市場の急落によって停滞を経験する。また日本市場における市場の飽和状態と、米ドルの変動などが要因となって、多くの伐採キャンプと

製材所が閉鎖に追い込まれ失業者が出たという。翌年も伐採業の景気低迷はつづくが、下半期から市場は上向き、ラミン合板材とベニア材 (メランティ) の取引値が記録的な高値をつけるに至る。大規模な木材加工工場の開業にともない、現場は労働力不足に陥る。

1973年は前年のめざましい回復基調がつづいたが、年の終わりにラミン材の需要が下落する。しかしメランティ市場は良好。州内の森林の枯渇と、FAOによる伐採ライセンス発行の停止がつづき、丸太の伐出し量の減少は年いづばい続く。またFAOの推奨によってサラワク木材産業開発公社 (STIDC) が設立される。製材の輸出量が増加するいっぽうで、在来住民による移動焼畑が問題視されるようになる。

1974年は世界的な石油危機により木材市場が急激に落ち込みをみせ、木材生産量も落ち、多くの伐採キャンプは閉鎖に追い込まれる。翌1975年は一転して景気が上昇傾向をみせたが、日本などのバイヤーは商品に品質をもとめるようになる。木材輸出量は前年比25%の下落をみせるものの、市場の楽観的ムードによって森林局の人材確保がもとめられた。

1976年は、香港や日本などの海外市場が良好にあって、丸太生産も製材も輸出量は完全に好転する。ライセンス発行数は、1975年に43社だったが76年には151社へと大幅に増加した。サラワク森林局はとくに専門職において深刻な人材不足を経験する。同76年の第4四半期から丸太の輸出量が下降したが、翌77年には製材の輸出量が前年比11.3%と記録的な伸びをみせた。



湿地林からの木材運び出し作業 (1970年代)

1978年は、日本など輸出相手国における住宅市場の活況やサバ州の丸太輸出量の制限により、丸太生産量が前年比22.5%の伸びをみせた。いっぽうで、在来民の移動焼畑が再び問題視される。また伐採ライセンスは、50万エーカーの土地内に53社へ発行され、過密状態から森林局はライセンスの発行停止も考慮し始める。また丸太原木の輸出を止め、地元業者による加工も促される。

森林局の60周年をむかえた1979年は、丸太生産量は前年

比 25.7%の増加。製材は 13.8%の減少。

世界市場における熱帯硬材への需要の高まりから、取引価格の高騰をうけ収入は増加。専門職員の人材不足が続く。そして 1970 年代の 10 年間における木材産業は、製材所数は 122 から 127 に増加、形板とダボ製造所は 0 から 17、積層板は 0 から 4、合板ベニアは 1 から 3 に増加した。主要な輸出相手国は日本がほぼ常にトップにあるが、1978 年のみ台湾の輸入量が日本を上回った。

以上のように、リー氏が伐採キャンプに務めた 1970 年代の木材産業発展の軌跡が話された。また一方で、サラワク州内で定められた 8 評価区画とは別に、1970 年代に侵攻した泥炭湿地林における伐採について話していただいた。植生の豊かさで知られる泥炭湿地林は、沿岸部の低地に位置することでアクセスが容易なことと、またラミンやメランティなど高価な樹木の豊富な植生によって、サラワクでは早くも 1947 年に商業伐採が始まった。現在はもうほとんどが伐り出され、土地はすでに別の用途に転用されている。

このように、リー氏はサラワクの森林にこれまで 40 年間関わってこられた。サラワク森林局とサラワク木材協会の組織の窓口役として、その間は日本の多くの生態学研究者の受け入れを率先して担い、とくに京都大学では 1988 年以後リー氏が現地カウンターパートとしての役割を負ってきた。

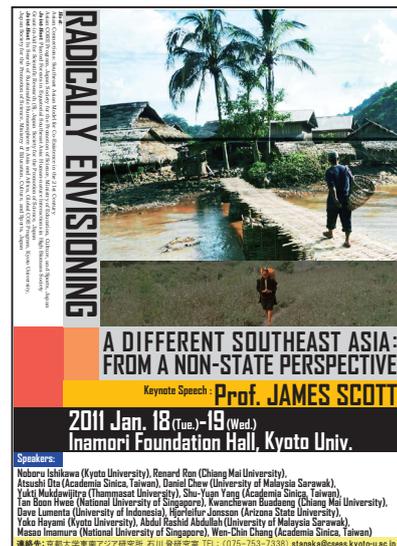
サラワクの森林をめぐる環境は、これまで大きく変化してきたが、リー氏は今後ともサラワクの森林変化に注目していきたいと語り、講演を締めくくった。

(報告：長谷川 悟郎)



リラックスした雰囲気の中で講演会は行われた 撮影：中根 英紀

プロジェクト関連の企画など



2011年1月18-19の両日、James Scott 氏を基調講演者に迎え、主催：日本学術振興会アジア研究教育拠点事業「グローバル時代における文明共生：東南アジア社会発展モデルの構築」共催：グローバル COE プログラム「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」および基盤研究 S「東南アジアにおけるプランテーション型バイオマス社会の総合的研究」以上の協賛により公開セミナー：“RADICALLY ENVISIONING A DIFFERENT SOUTHEAST ASIA: FROM A NON-STATE PERSPECTIVE”を開催。

KYOTO-UNIMAS Seminar

今回は University Malaysia Sarawak (UNIMAS) より 2 名の研究者を招いて公開セミナーを開催いたします。

“Chinese in Sarawak, 1946-1963: Education, Land and Belonging”
- Daniel Chew: 東アジア研究所, UNIMAS

“Tamu: Trading at the Edge”
- Jayli Langub: 東アジア研究所, UNIMAS

日時：2011 年 1 月 24 日 (月) 13:00~16:00
場所：京都大学稲盛財団記念館 3F 東南亭
主催：科学研究費補助金 基盤研究 S (代表：石川 登)
「東南アジア熱帯域におけるプランテーション型バイオマス社会の総合的研究」

マレーシア大学サラワク校 (UNIMAS) から来日した研究者を迎えて基盤 S 主催の公開セミナーを開催。1 月 18-19 日のセミナーとは違った、くつろいだ雰囲気の中で基盤 S プロジェクトメンバーと意見交換を行った。

これらのイベントの詳細および講演内容につきましても随時ニュースレターにて報告いたします。

プロジェクト参加メンバー（研究代表者・研究分担者・連携研究者・協力者）

研究代表者	石川 登	人類学	京都大学東南アジア研究所
研究分担者	祖田 亮次	人文地理学	大阪市立大学文学研究科
	河野 泰之	自然資源管理	京都大学東南アジア研究所
連携研究者	杉原 薫	グローバルヒストリー	京都大学東南アジア研究所
	水野 広祐	農業経済学	京都大学東南アジア研究所
	徳地 直子	森林生態保全学	京都大学フィールド科学教育研究センター
	内堀 基光	文化人類学	放送大学教養学部
	鮫島 弘光	動物生態学	京都大学東南アジア研究所
	藤田 素子	鳥類生態学	京都大学東南アジア研究所
	甲山 治	水文学	京都大学東南アジア研究所
	福島 慶太郎	森林生態系生態学	京都大学フィールド科学教育研究センター
	津上 誠	文化人類学	東北学院大学教養学部
	奥野 克巳	文化人類学	桜美林大学リベラルアーツ学群
協力者	市川 昌広	東南アジア地域研究	高知大学農学部
	小泉 都	民族植物学	総合地球環境学研究所
	生方 史数	環境経済学	岡山大学環境学研究科
	市川 哲	文化人類学	立教大学 AIIC
	定道 有頂	ライフサイクル・アセスメント	産業技術総合研究所
	Nathan Badenoch	東南アジア地域研究	京都大学東南アジア研究所
	田中 耕司	東南アジア地域研究	京都大学次世代研究者育成センター
	佐久間 香子	文化人類学	京都大学アジア・アフリカ地域研究科
	小林 篤	歴史学	京都大学アジア・アフリカ地域研究科
	Wil de Jong	森林社会学	京都大学地域研究統合情報センター
	内藤 大輔	地域研究	京都大学／Yale University
	Jason Hon	動物生態学	京都大学地球環境学堂
	加藤 裕美	文化人類学	総合地球環境学研究所
	Khairuddin Ab Hamid	情報学	University of Malaysia Sarawak (UNIMAS)
	Lau Seng	水文学	University of Malaysia Sarawak (UNIMAS)
Abdul Rashid Abdullah	社会人類学	University of Malaysia Sarawak (UNIMAS)	
Lee Hua Seng	森林社会学	Sarawak Timber Association	
太田 淳	歴史学	Academia Sinica (Taiwan)	
大竹 真二	映像人類学	モイ	
木谷 公哉	情報学	京都大学東南アジア研究所	
事務局	田中 園子	総務・会計担当	京都大学東南アジア研究所
	中根 英紀	情報管理・発信担当	京都大学東南アジア研究所

京都大学 東南アジア研究所
606-8501 京都市左京区吉田下阿達町46
TEL/FAX: 075-753-7338
<http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp>
E-mail: nakane@cseas.kyoto-u.ac.jp
編集 中根 英紀 (基盤S事務局)

